

4. 幼児のかかわりを促す保育環境のアフォーダンス

教育学諸岡研究室 忍久保 武士

大学院研修を終えて

【はじめに】

「幼児教育は生涯にわたる教育の基礎である」と述べられているように、ある1つの人格がどのように形成されていくか、その後の学校教育にどのように適応していくのか、そのためにつけておくべき力とは何なのかを、現場実践を通して日々考えさせられている。そのような日々を送る中で、幼児教育の人間関係づくり、さらにその土台としてのモノとかかわる力をつけていくことが、その後、ヒトとかかわる力をつけていく上で大きな意味を持つということを感じるようになった。小学校以降は教科教育が中心となり、時折、人間関係がおきざりにされるが、上に挙げたような問題は、それぞれ個人の人間関係を構築していく力に大きく関係している。幼稚園は、家族以外の他者と生活づくりをしていかなければならない場所である。園の最高学年となる5歳児の学年目標として、金沢大学附属幼稚園では自分達で自分達の生活を創っていくことが置かれている。そのために、友達と力を出し合って遊びや生活をすすめていく経験の積み重ねを大切にしている。

幼児の遊びや生活をする姿を見ると年齢による行動の違いがある。例えば、落ち葉という同じモノを見つけたとする。3歳児は集めたり、踏んだり、シャワーのようにかぶったりする姿がよく見られた。4歳児では、落ち葉のお風呂やさんや、やきいもやさんごっこをして遊んでいた。5歳児は、木で周りを囲んだところにたくさん集めてきて、来春に花や野菜を植えるための堆肥づくりをしていた。このように、同じモノを見つけたとしても、主に学年によって遊び方が異なっている。このようなことは、遊びだけでなく、話の聞き方、製作、身支度、食事など生活活動においても見られる。そのため、行為だけを見るのではなく、行為を起こすために幼児が感じたことをより細かく見ていく必要を感じている。

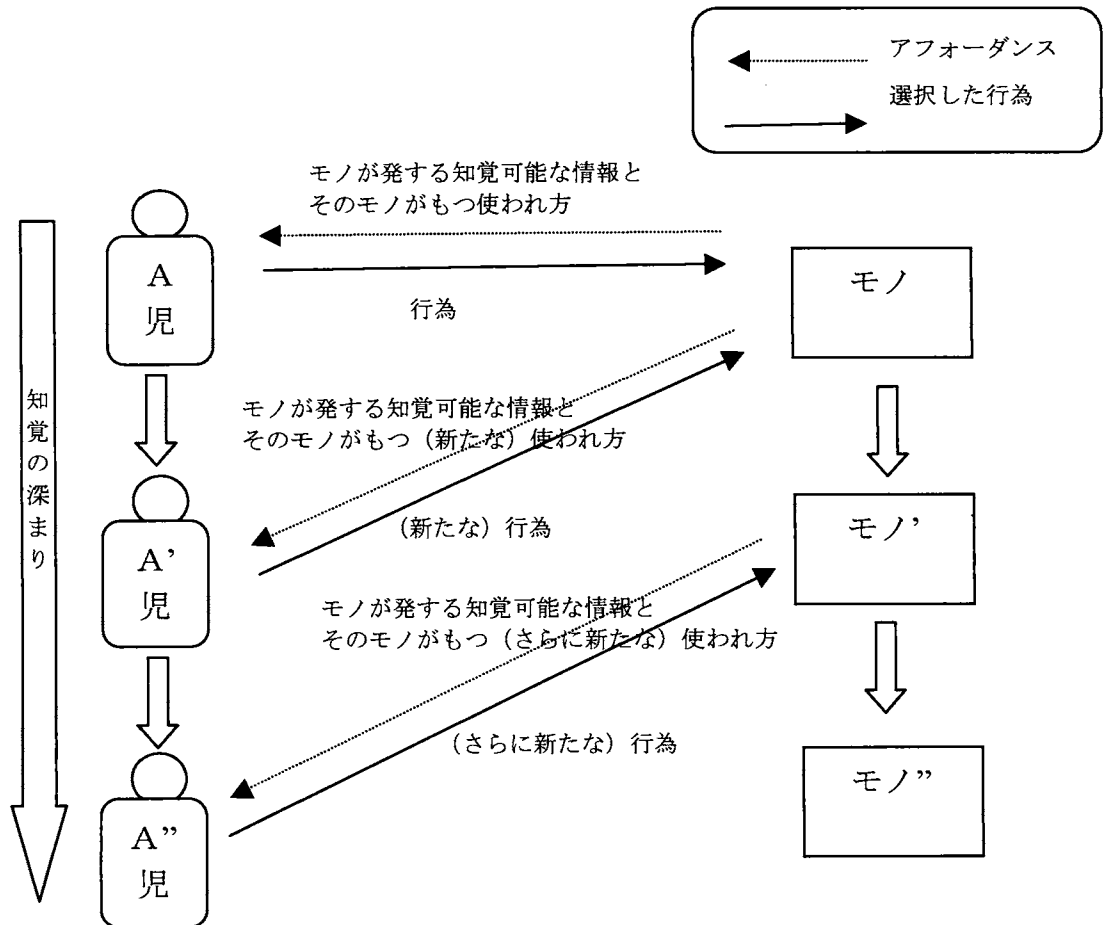
幼児には「刺激→思考→行為」というように、何かを見て、考えて、行動するといった行動を分析する際に取りられていた図式で表せられないこともあるように思える。それは、環境からの刺激と幼児の行為が一方通行の関係ではなく、相補的な関係にあるのではないかということである。そのことについては、生態心理学のアフォーダンス理論が幼児と環境との関係性を表すことができると考える。幼児が園の中で出会う環境をモノ(具体物)、ヒト(他者)、コト(場、状況、概念など抽象的なもの)に分け、アフォーダンスという概念をもとに検証し、保育環境のデザインにつなげていこうと考えた。

アフォーダンスとは、アメリカの心理学者ギブソンが1980年代に提唱した概念である。ギブソンの著書『生態学的視覚論』には、「環境のアフォーダンスとは、環境が動物に提供するもの、良いものであれ、悪いものであれ、用意したり備えたりするもの」と記されている。アフォード(afford)(提供する)という動詞をもとにギブソンがつくった造語である。彼の概念を踏まえ、まず、モノがもつアフォーダンスについて定義する。

モノのアフォーダンス＝モノが幼児に与える行為
 ＝モノが発する知覚可能な情報 + そのモノがもつ使われ方

この定義を用い、ヒトがモノのアフォーダンスを知覚する模式図を示す (図1)

(図1) A児がモノのアフォーダンスの知覚を深め育っていく模式図



例えば、園庭にチューリップの花びら (モノ) が落ちているとする。A児は花びらを見つけて綺麗だと感じしばらく見とれていた (A'児に変容)。花びらを綺麗だと見ることのできるモノ (アフォーダンス) として知覚した。しばらくして、A'児は花びらを拾った。花びらを拾うことのできるモノ (アフォーダンス) として知覚したといえる。何枚か拾っているうちに花飾りをつくらうと思いついた (A''に変容)。花びらを花飾りに使うことのできるモノ (アフォーダンス) として知覚したと言える。さらに、モノ自体もA児の行為によっては変化していく (モノ'、モノ''...) ことがあり、それに対してA児がアフォーダンスを知覚していくというかわりが見られる。また、友達とのかかわりには、モノのアフォーダンスを媒介にされることが多い。

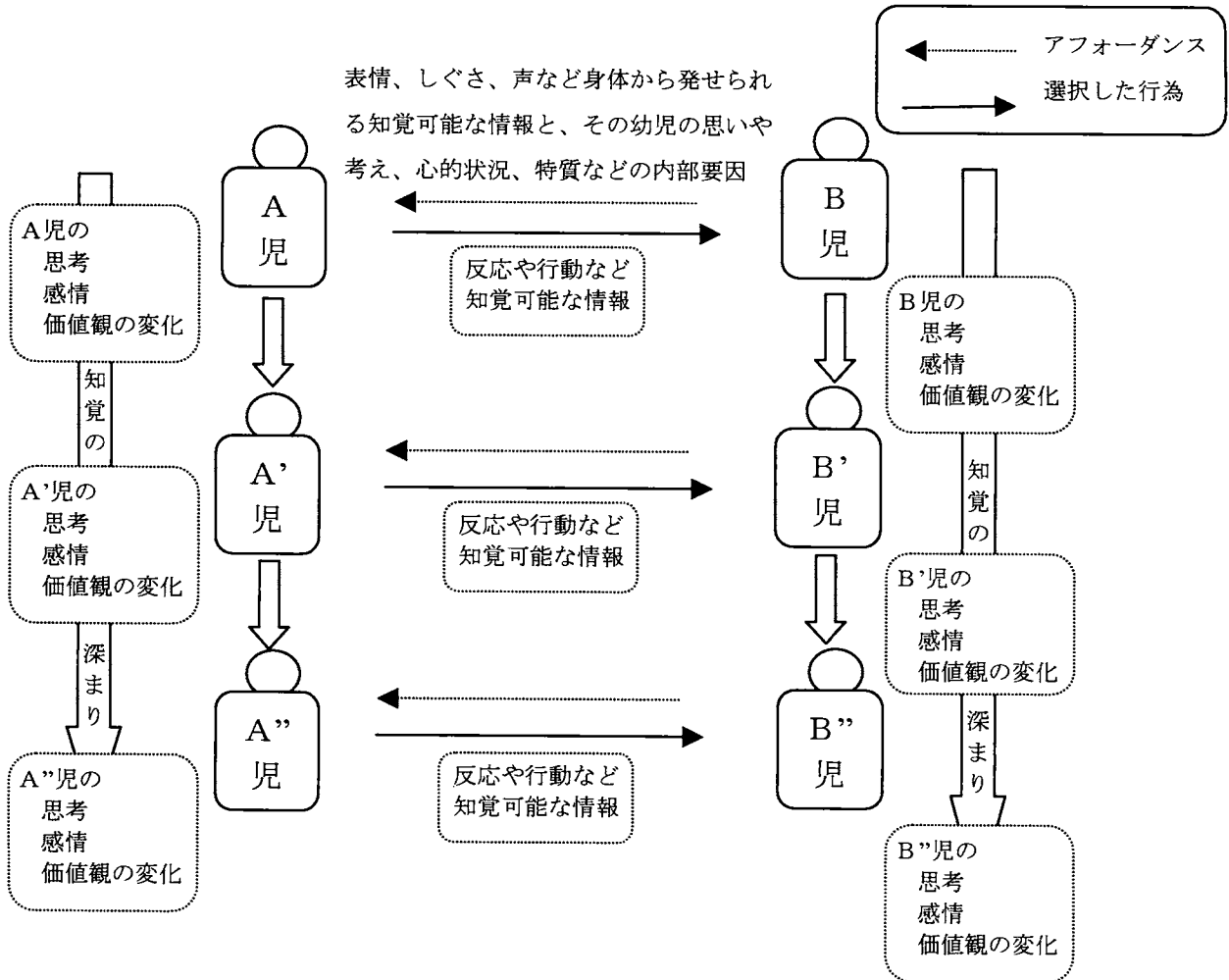
さらに、ヒトのアフォーダンスを定義する。ヒトはモノと異なり動いたり、気持ちや状態の変化の間隔がモノに比べ短い。そこで、

ヒトのアフォーダンス＝ヒトが幼児に与える行為

＝ 表情、しぐさ、声など身体から発せられる知覚可能な情報 + その幼児の思いや考え、心的状況、特質などの内部要因

と定義する。この定義を用い、ヒトのアフォーダンスの知覚を深めていく模式図を示す（図2）。

（図2） A児がヒト（B児）のアフォーダンスの知覚を深め育ち合っていく模式図



B児は、A児がB児と〇〇することを可能とするヒトのアフォーダンス—表情、しぐさ、声など身体から発せられる知覚可能な情報と、その幼児の思いや考え、心的状況、特質などの内部要因—を発している。そこで、A児はB児から複数の行動の可能性（選択肢）を受け取りながら〇〇することを選びとり行為を行う。その行為に対してアフォーダンス→行為→アフォーダンス→・・・という何重もの（入れ子的な）相補的なやりとりが起こる。A児がB児からのアフォーダンスを受け取り、かかわり始めることで成長しA'児となる。B児は、A'児からアフォーダンスを受け取りB'児となる。つまりアフォーダンスを受け取り合うことでA児とB児は、A'とB'に、その後、A''とB''にA'''とB'''・・・となっていく。このA→A'→A''・・・、B→B'→B''・・・という変容は、まさしく、他者と互恵的に学び育っていくという協同性に他ならない。

最後に、上述したモノとヒトのアフォーダンスの定義を用いてコトのアフォーダンスを定義する。コトのアフォーダンスの対象は、状況、場、役割、係、責任、きまり、ルールなど幼児をとりまく抽象的な環境であり、それらは先に述べたモノ、ヒトのアフォーダンスが入れ子的に関係している。直接コトのアフォーダンスを受け取る以外に、モノによって形成されたコトの場合にはモノのアフォーダンスを、ヒトによって形成されたコトの場合にはヒトのアフォーダンスを、モノとヒトによって形成された場であればモノとヒトのアフォーダンスを幼児は受け取っている。

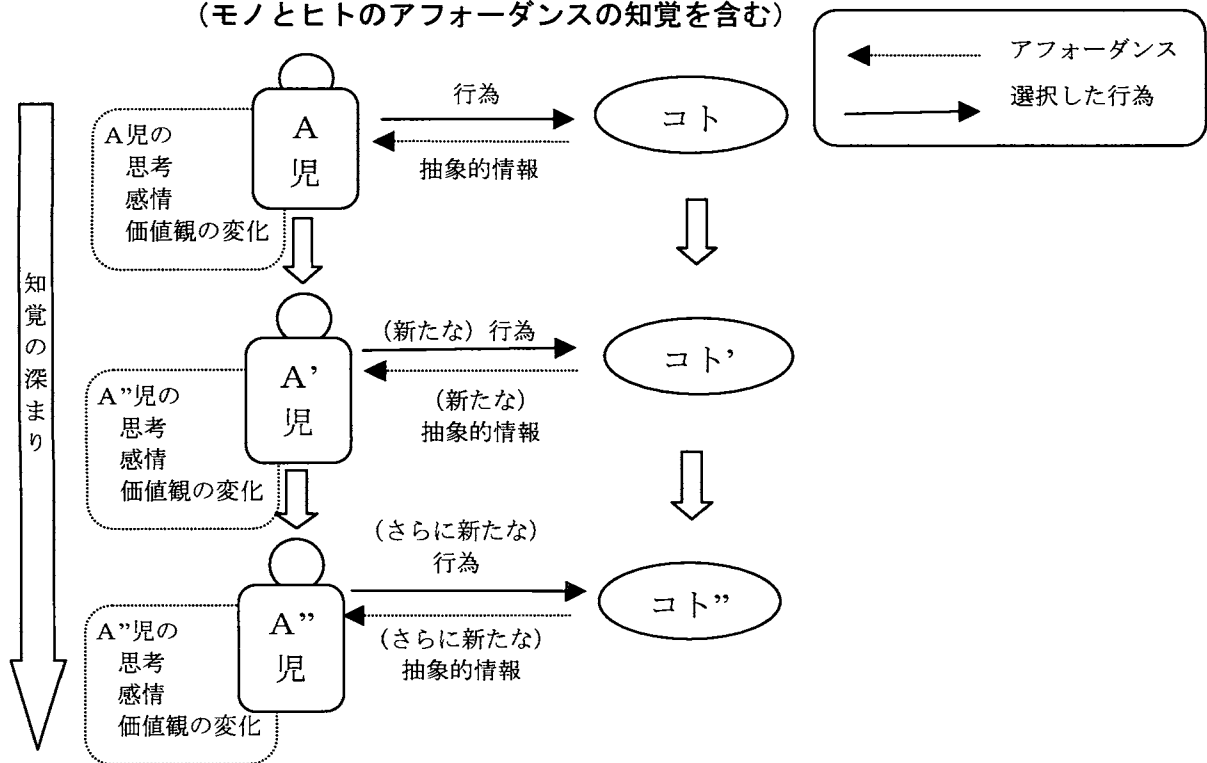
コトのアフォーダンス＝コトが幼児に与える行為

$$= \begin{matrix} \text{状況、場、役割、係、責任、きまり、} \\ \text{ルールなど幼児をとりまく抽象的なもの} \end{matrix} + \begin{matrix} \text{コトを構成するモノのアフォーダンス} \\ \text{コトを構成するヒトのアフォーダンス} \end{matrix}$$

(五感で直接知覚できないもの)

図3のように、A児は自分を取り巻く抽象的な環境から情報を受け取り、適した行為を選ぶようになる。例えば、お茶会では静かに正座をする、鬼ごっこでは鬼になった人は追いかけるなどの行為である。その際、お茶会で使用する畳のように、コトの抽象的情報のアフォーダンスをより明確にするモノのアフォーダンスが知覚される。同様に、お茶の先生がいれば、ヒトのアフォーダンスがコトの抽象的情報をより知覚されやすくしている。このように、モノやヒトのアフォーダンスが、コトのアフォーダンスをより知覚しやすくすることがよくある。一方で、牛乳当番（目の前にない牛乳を冷蔵庫まで取りに行き、クラスの幼児全員に配る当番活動）のように、係自体が幼児に知覚され行為を促すというコトも、幼稚園生活には多く潜んでいる。

(図3) A児が(コト)のアフォーダンスの知覚を深め、育ち合っていく模式図
(モノとヒトのアフォーダンスの知覚を含む)

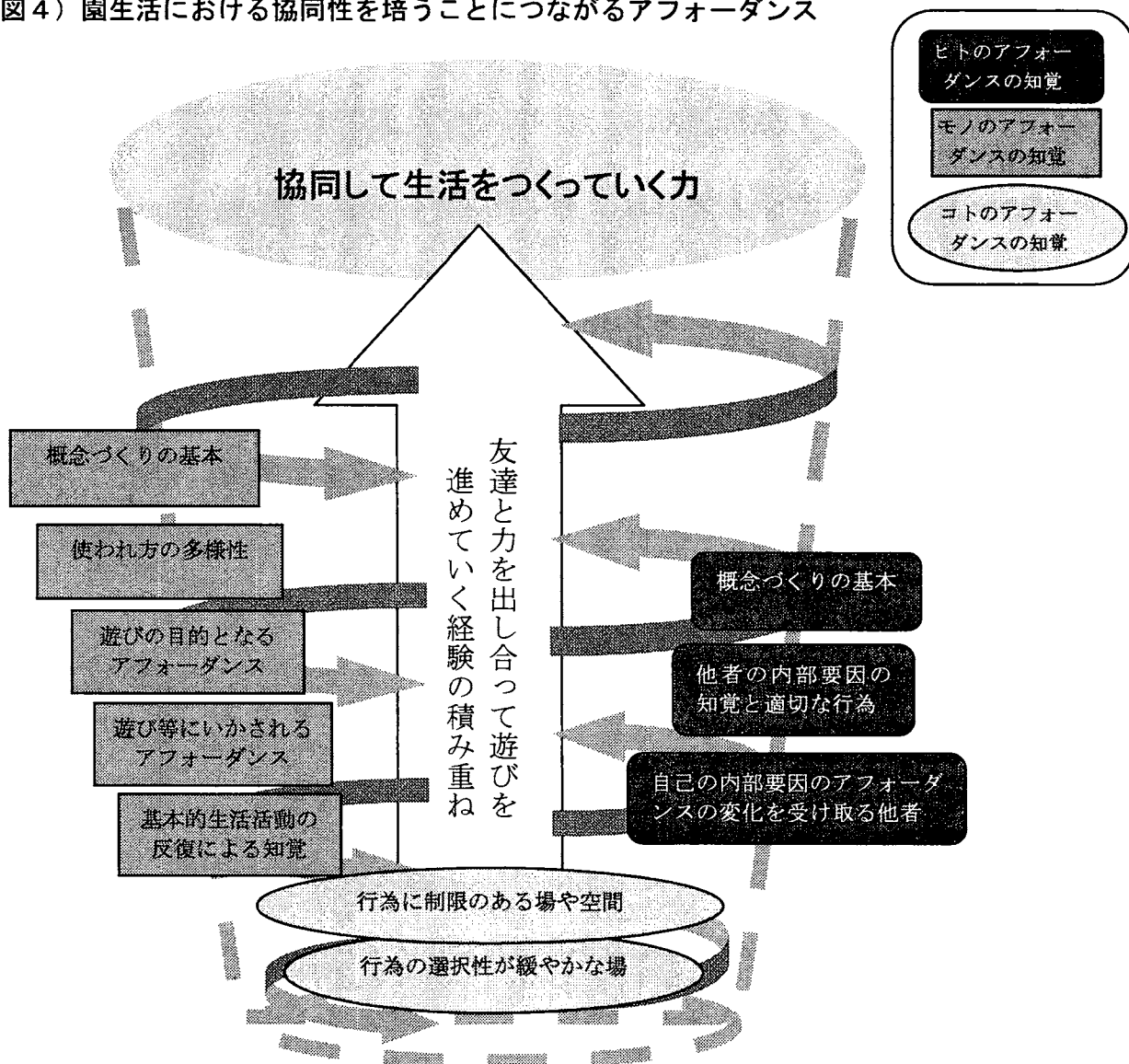


このように、幼児が知覚しているアフォーダンスを、身の回りの環境によってモノ、ヒト、コトに分類し定義した。実際の園生活では、これらの対象が単独で存在していることはほとんどない。並列であったり、層構造になっていたりする多数のアフォーダンスを分析するにあたって、これらの定義は基本となる。次章からは、実際の幼児が知覚しているアフォーダンスを分析し、幼児の協同性を高められるモノ、ヒト、コトの在り方を探っていく。

【おわりに】

遊び、生活の2つの場面から幼児のアフォーダンスを分析した結果、幼児のかかわりを促す環境のアフォーダンスを表すことができた(図4)。それらから、幼児が友達とかかわりながら遊んだり生活活動をすすめたりしていく中で知覚しているアフォーダンスのモノ、ヒト、コト、それぞれの傾向が見えたことが成果である。

(図4) 園生活における協同性を培うことにつながるアフォーダンス



モノのアフォーダンスの知覚は、遊びだけでなく生活活動においても多くなされている。基本的な生活において毎日繰り返しかかわるモノからは、細かなアフォーダンスを受け取っている幼児が多い。知覚システムが細分化することで、生活活動だけでなく遊びの中にも生かされている。

5歳児が他者とかがわって遊びや生活をしているときには、ヒトの内部要因のアフォーダンスの知覚が多くなされている。友達と内部要因のアフォーダンスの知覚が適切に行われ合おうと遊びが持続される。

抽象的なコトのアフォーダンスは、幼児によっては知覚を誤ったり、行為を誤ったりしやすい。コトのアフォーダンスの中にはヒトやモノとの関係性の中であつてつくられているものもある。そのようなコトのアフォーダンスを適切に知覚することは、必然的に幼児らのかかわりを促している。

【参考文献】

- ・J. J. ギブソン『生態学的視覚論』サイエンス社、1985年
- ・エレノア J. ギブソン『アフォーダンスの発見』岩波書店、2006年
- ・佐伯胖『幼児教育へのいざない』東京大学出版会、2001年
- ・佐伯胖『共感』ミネルヴァ書房、2007年
- ・佐伯胖・佐々木正人『アクティブ・マインド』東京大学出版会、1990年
- ・佐々木正人『アフォーダンス入門』講談社、2008年
- ・佐々木正人『アフォーダンス-新しい認知の理論-』岩波書店、1994年
- ・佐々木正人・三嶋博之『アフォーダンス』青土社、1997年
- ・佐々木正人編『アフォーダンスの視点から乳幼児の育ちを考察』小学館、2008年
- ・野村寿子・佐々木正人『遊びを育てる』協同医書出版社、1999年
- ・佐々木正人・三嶋博之『アフォーダンスと行為』金子書房、2001年
- ・三嶋博之『エコロジカル・マインド』日本放送出版協会、2000年
- ・河野哲也『<心>はからだの外にある』日本放送出版協会、2006年
- ・河野哲也『善悪は実在するか—アフォーダンスの倫理学—』講談社、2007年
- ・柴崎正行著『環境づくりと援助の方法』ひかりのくに、1997年
- ・柴崎正行・田中泰行「保育内容『環境』」ミネルヴァ書房、2001年
- ・柴崎正行・森上史朗『環境』東京書籍、2000年
- ・柴崎正行・無藤隆『保育講座 教育心理学』ミネルヴァ書房、1989年
- ・無藤隆・柴崎正行『保育講座 児童心理学』ミネルヴァ書房、1989年
- ・柴崎正行・田代和美『カウンセリングマインドの探求』フレーベル館、2001年
- ・鯨岡峻・鯨岡和子『エピソード記述で保育を描く』ミネルヴァ書房、2009年
- ・今井和子・神長美津子『『わたしの世界』から『わたしたちの世界』へ』フレーベル館、2003年
- ・神長美津子『保育の基本と環境の構成』ひかりのくに、1998年
- ・正木健雄『希望の体育学』農山漁村文化協会、2002年
- ・正木健雄『からだづくり・心づくり』健康双書、2002年
- ・正木健雄編『子どものからだは舐まれている』柏樹社、1990年
- ・余語琢磨編『間主観性の人間科学』言業社、1997年
- ・民秋言『幼稚園教育要領・保育所保育指針の成立と変遷』萌文書林、2008年